老人ホームの見学途中

ミゲル：食堂
図書室
便所、間違えないように、女性便所の向こう側にある。
医務室：医者はマリコンだ、しかしいい人だ。
薬材室：ここに薬があり、私達に届けられる。

女性：私の息子、しかし悪い人。ええ。

ミゲル：こんにちわ、ロシ、ご機嫌いかが。
管理室：年寄りは入るのを禁じられている。
中央玄関：もし逃げ出すなら、ここからだ。
君はテレビを見るのが好きかい。楽しみはここくらいだ。

エミリオ：しかし、見て、この動物の番組、本当のことをいうと、余り好きでない。

ミゲル：他の番組はやっていない。

エミリオ：チャンネルを替えることは出来ないの？

ミゲル：分からない、２年前に私が来た時からいつもこのドキュメント番組だ。
君、続けて行って良い？

ミゲル：体育室

エミリオ：体操着を持ってきていない。

ミゲル：心配しなくていいよ。誰も体操着など着ないでやっている。
最後のに良いものは、プールだ。

エミリオ：しかし、水着もまた持ってきていない。

ミゲル：心配はいらない、誰もプールを使ったことがないから。
これは飾りさ、来客によい印象を与えるためだ。

エミリオ：来客？

ミゲル：来客だ、ロッケフェレ、請求書を支払う者だ、君の息子や政府の人間…
彼らは老人ホームの顧客だ、君や私ではない。プールは見学者が来た時に見せるためのもので、ここを五つ星ホテルのように創っている。
だからプールは馬鹿げている、ここは年寄ばかりで、シャワーを浴びるのも人の手助けが要るものばかりだ。

エミリオ：然し私はいつも泳ぐのが好きだった。若い頃はよく海に行ったものだ。後に銀行に勤めてからは、少なくとも週に一回はプールに行った。だから、今は泳げないのが寂しく思うよ。

ミゲル：それなら、プールの鍵を頼んでみよう、プールを初めて使うことになる。

エミリオ：そうだとも、勇気を出して、頼んでみよう。

ミゲル：君が望むものは何でも私に頼んでくれ。水着は何としても手に入れるよ。

廊下で

ドニャ　ソル：貴方達、電話はどこにありますか？

ミゲル：ああ、今日は、ドニャ　ソル。

ドニャ　ソル：息子達に電話をしたいのです。彼らは私をここに入れたけれど、
私は、もう元気、私を迎えにきてほしいの。電話は何処かしら？

ミゲル：受付にありますよ、ドニャ　ソル。

ドニャ　ソル：それで、使わせてもらえるかしら？

ミゲル：心配しないで、多分大丈夫でしょう、私に今、少々お金を支払って、そうすれば受付で電話ができますよ。お分かり？

ドニャ　ソル：分かりました、息子たちは私を迎えに来なければいけないのよ、
もう、私は元気だもの。これで良いですか？

ミゲル：ええ、いいですよ。受け付けはこの廊下をまっすぐ行ったところにあります。そこで聞いてみてください。

ドニャ　ソル：はい、電話ね。私は息子たちに連絡して、私を迎えに来てもらう。
私は元気だから。

エミリオ：しかし、受付は入口の方ではないのかな？

ミゲル：そうだけど、心配しないでいいよ、ロッケフェレ。ドニャ　ソルは一日中電話を捜して歩いているのだ。しかし掛けられない。そうして気晴らしをしているのだ。君が見たように。
受け付けを見つけたとしても、何をするのか忘れてしまう、例えうまくいっても、全ての場合、受付は電話を使わせてはくれない。